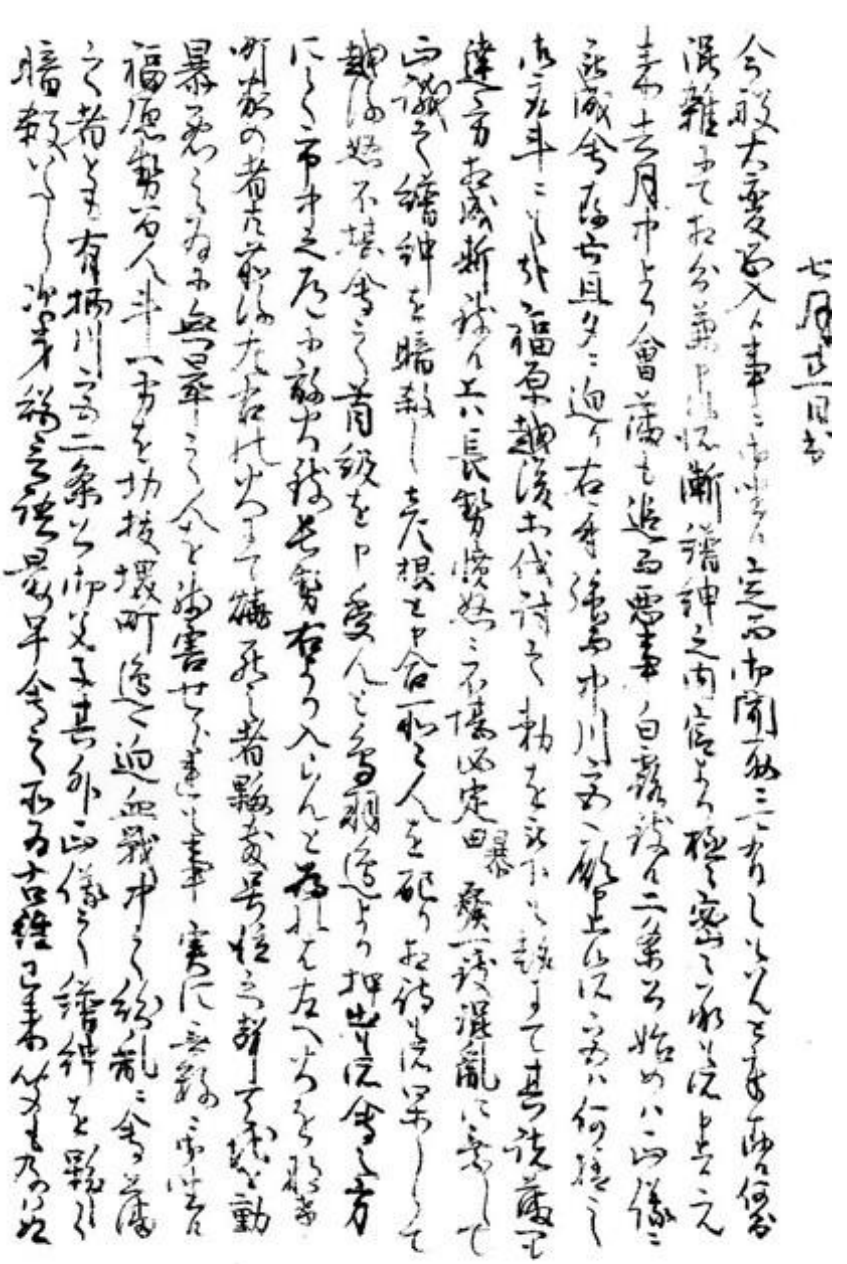
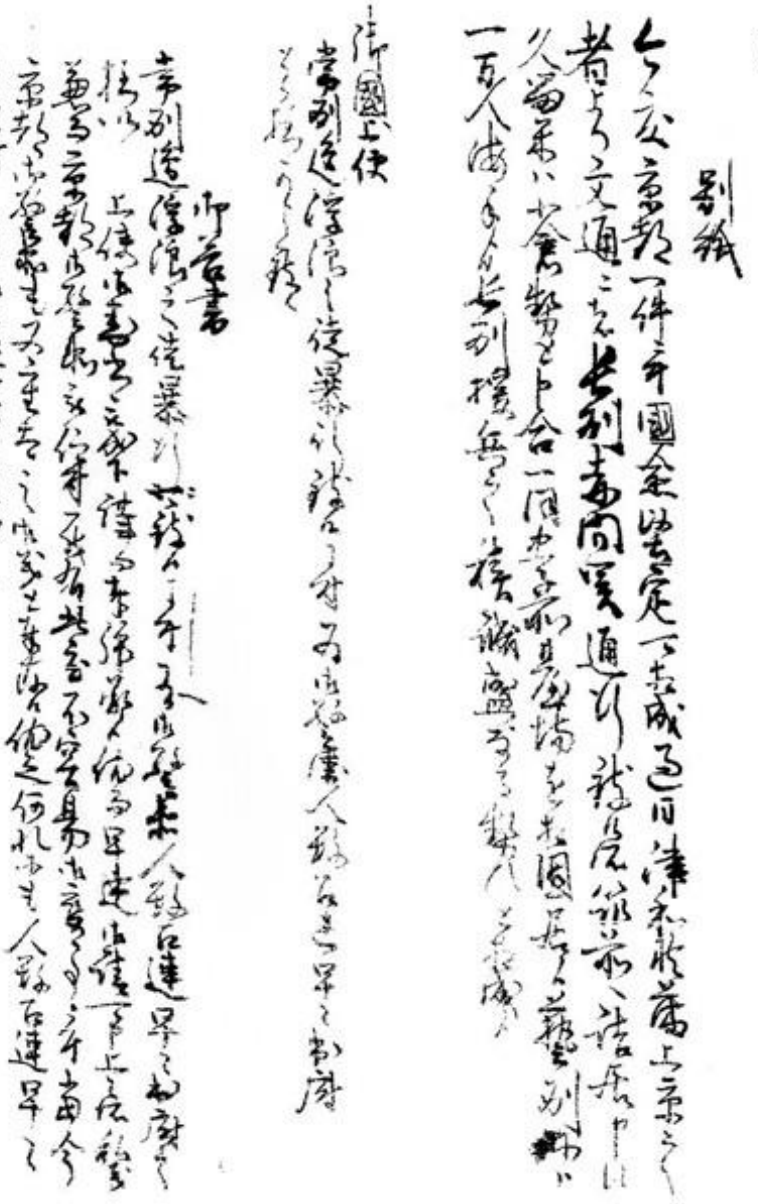


【五一頁】

（三十三）七月廿一日出《門の変の際の長州方動静に付、縉紳の内官より承る内情報告》

七月廿一日出

今般大変恐入候事ニ御坐候、定而御聞取ニ可有之候ハんと奉存候、何分混雑にて相分兼申候所、漸縉紳之内官より極々密々承候所申上候、元来去月中より會藩も追而悪事白露致候、二条公始めハ正儀ニ被成會存亡且夕ニ迫り右ニ付強而中川宮へ願申上候所、宮ハ何様之御取計ニ候哉、福原越後等伐討之勅を被下候趣にて其諸藩へも達方相成、斯致候上ハ、長勢憤怒ニ不堪必定暴發可致、混亂に乗して正議之縉紳を暗殺し彦根と申合、所々人を配り相待候所、果して越後怒不堪會之首級を申受んと鳥羽邊より押出候所、會之方にて市中之道に放火致、長勢右より入らんと為れは左へ火をなけ町屋の者共前後左右の火にて焼死之者夥敷、号泣之聲天地を動、暴悪之為に無辜之人を残害せられ候事、実に無数ニ御坐候、福原勢百人計一方を切抜堺町邊へ迫、血戦中之紛亂ニ會藩之者とも有栖川宮・二条公御父子其外正儀之縉紳を夥しく暗殺いたし次第絶言語、最早會之所為古往己来聞も及ハぬ



【五二頁】

極り候云々

(三十四)別紙《此度京都一件に際し西国情勢について》

別紙

今度京都一件ニ付國愈堅定可相成、過日津和野藩上京之者より文通ニ者長州赤間関通行致候所、筑前へ詰居申候久留米ハ小倉勢と申合、一同豊前臺場を相固居候藝州にハ一万人海手ゟ長州援兵之積、誠盛なる勢ひと相成候、

(三十五)御國へ上使《常州辺浮浪之徒暴行致候に付警衛の為人数出府の旨指令》及び御答書

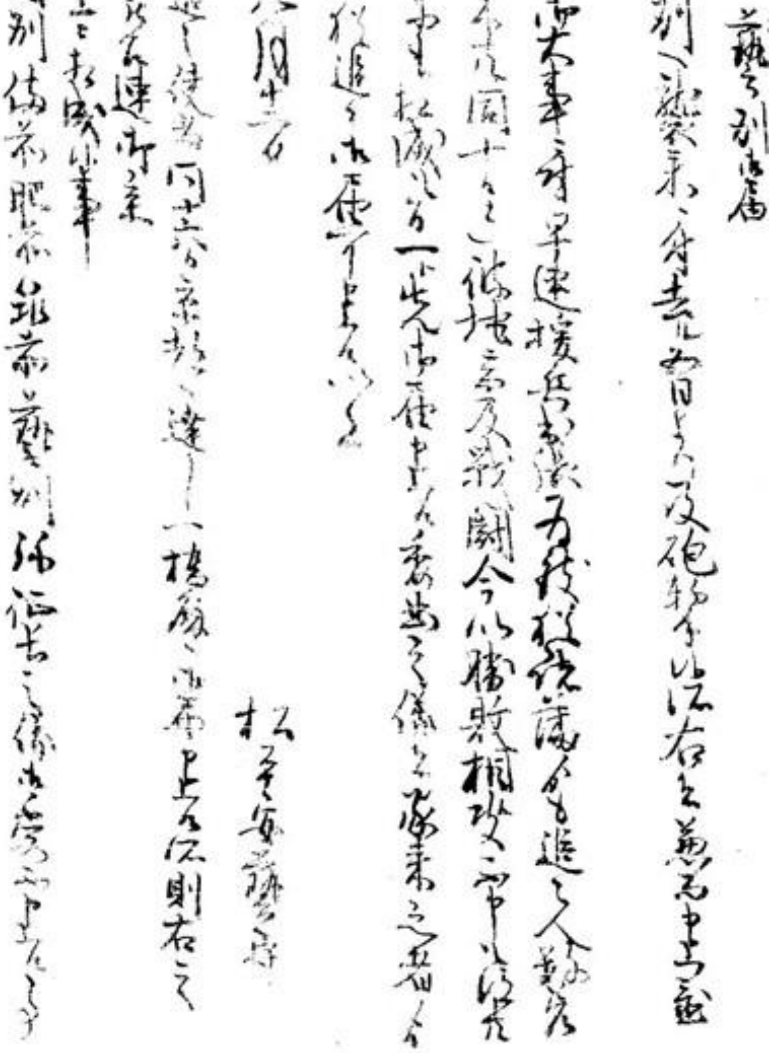
御國へ上使

常州邊浮浪之徒暴行致候に付、為御警衛人数召連早々出府候様可被致候

御答書

常州辺浮浪之徒暴行致候に付、為御警衛人数召連、早々出府之様以　上使御封書被成下、謹而奉拝承候、依而早速御請可申上候所、私義

兼而京都御警衛被仰付罷有、此度不容易御変事ニ付、当今京都御警衛も又重太之御義と奉存候、依之何れにも人数召連早々参府之上御答可奉申上候、以上



【五三頁】

（三十六）芸州御届《夷船長州へ》

藝州御届

夷船船長州へ襲来ニ付去ル五日より及砲撃候所右者兼而申上置候通、

皇國之御大事ニ付早速援兵出張為致、猶諸藩ゟも追々人数差出、私家来共同十日迄彼地ニ而及戦闘、今以勝敗相決不申候得共余り延日にも相成候間、一ト先御届申上候、委曲之儀者家来之者ゟ言上可仕、猶追々御届可申上候　以上

八月十二日　　松平安藝守

右早追之使者同十六日京都へ達し一橋殿へ御届申上候所、則右之使者被召連御参

内言上ニ相成候事

因州・備前・肥前・筑前・藝州弥征長之儀御受不申上候事

【五四頁】

(三十七)當七月十九日一条《禁門の変の戦況報告、京詰同役より江戸詰同役への来書》

當七月十九日一条

七月十九日明時頃鉄炮之音（十七日方より模様相知候）御所近邊之様に相聞得候ニ付、はねくりおき弥伺候に無相違覚候に付、帯を縄廻にし袴、羽織、大小をおつはさんて寺町本能寺門前（旅宿なり）出けるに往来之勢市中狼狽夥敷、鉄炮殊ニ甚敷ニ付其場に望（ママ）、模様を見んと思ひて、両三輩連歩行し時に三町程西に旗を揚て軍勢らしく見候故近付みるへしと駈行き候所、甲冑にて一番にハ「ニ勝」二番ニハ「ニ義勇」と認しを流し通りし故、町人に何れ之勢なるやと相尋候時に山崎に集屯セし長州勢之内と答、夫よりいよ〳〵近詰て見るに、夜中より五里余も押寄セ参候事故、高張提灯入長持壱棹（高張提灯ハ皆八印、是ハ八幡に籠り候為敷）、兵粮長持壱棹、其外玉薬入候長持等を初四棹計と見受候、人数五拾人位堺町御門を目當に通り候故、向方より先方より鉄炮打懸候為右人数直に其跡へ付御門前弐丁はかり前へ相通候所、向方より鉄炮打懸候為右人数一同散亂、長持を置候而人足共ハ逃隠れ候様に御坐候、若し玉に當り死たりとも壱石一盃等に不相成共に其所之町家に身を

【五五頁】

忍ひ、玉の数々伺候得共、暫く手元に参り音も無之故、軒端を
傳ひ早々に帰路に趣し折々、旅宿之近邊出火とみえ、何所と
聞けは長州やしき之由、是者壱町旅宿より離れす、乍去風なくして
其屋敷にて鎮火ニ可及程ニ相至候所、
御所近邊より出火と相成、夫より諸方へ放火致、夜中三方に火ハ
廻り、帰路彦根公之軍勢等夥しく行軍見帰候所、御飛脚被差立候
御取調共長州人より御同席御留主居中迄差出候書載凡八本も拾
五枚計之分写取へ相掛候所、三方に黒煙を立筒音聞得て相認候
其内、長州屋敷ハ鎮火と相成三方といへとも三丁も四丁も五丁もはなれ
居候故、旅宿抔容易ニ焼失抔と被思不申候所火通し（ら）てハ大炮にて
放火致歩行候故、竟に隣寺へ火移り、夫より先筆を留、荷物跡付
はかりもと思ひて指出て（是ハ残申候）御屋敷へ立退候得共、同所も危く、立退
之所へ参候、是を立退て何れと決着も無之故、先外に莚を敷、座して
御用状ハ粘付いたし御飛脚へ相渡、間もなく自分ニ鑓を持、陣羽織
着し、下人御用ものと飯継を為持て歩行見るに、火にハ驚く所ニ無之
とも、戦之有之為皆家財取運ひ、市中散乱、彼是七ツ時過至れと
尻落着所もなく、誠に哀なる老若男女狼狽かなしミ、何れとなく
流浪しても不相成故、本居候所へ参候ハヽ可然と存目當に参候、是以

【五六頁】

家財取運ひあはたゝき居候故、如何して斯やと尋候所、彦根之本陣を長州勢焼討すると申事にて仕末を致居候所也と

いふより左様之事ハ無之筈一夜之宿を相頼と申入候得共、不聞届無是非其所をはなれ、壱町計奥へ参相頼候所、聞済安堵致候

一鷹司殿に長州勢押入候為此所會津にて焼拂、最初三貫目筒打候得共、練屏不破其後拾三貫目筒漸く破り放火セしといふ

一長州へ出迎ひ候ハ會津・彦根・因州・薩摩之由因州ハ出張とまてにて不争敵と不逢様ニ計致居候由

一中立賣御門會津之御固に付爰に長勢参り相戦といふ、會勢弱り候為薩勢と入替候所、薩ニ遺恨なし、降参するといひて

一戦も無之由、仍而薩勢一橋公へ御伺申上候所則答不能して、先其勢ハ明屋敷へ入置へし、拾八人之由、　朝廷へ伺之上と申事にて及伺候所無残討果すへくとの義に付、夫より鉄炮にて討立候といふ、六人ハ見得不申残皆死といふ

一右之外騒動一両日中色々風説も有之候得共、其後真説顕れ候故是を略

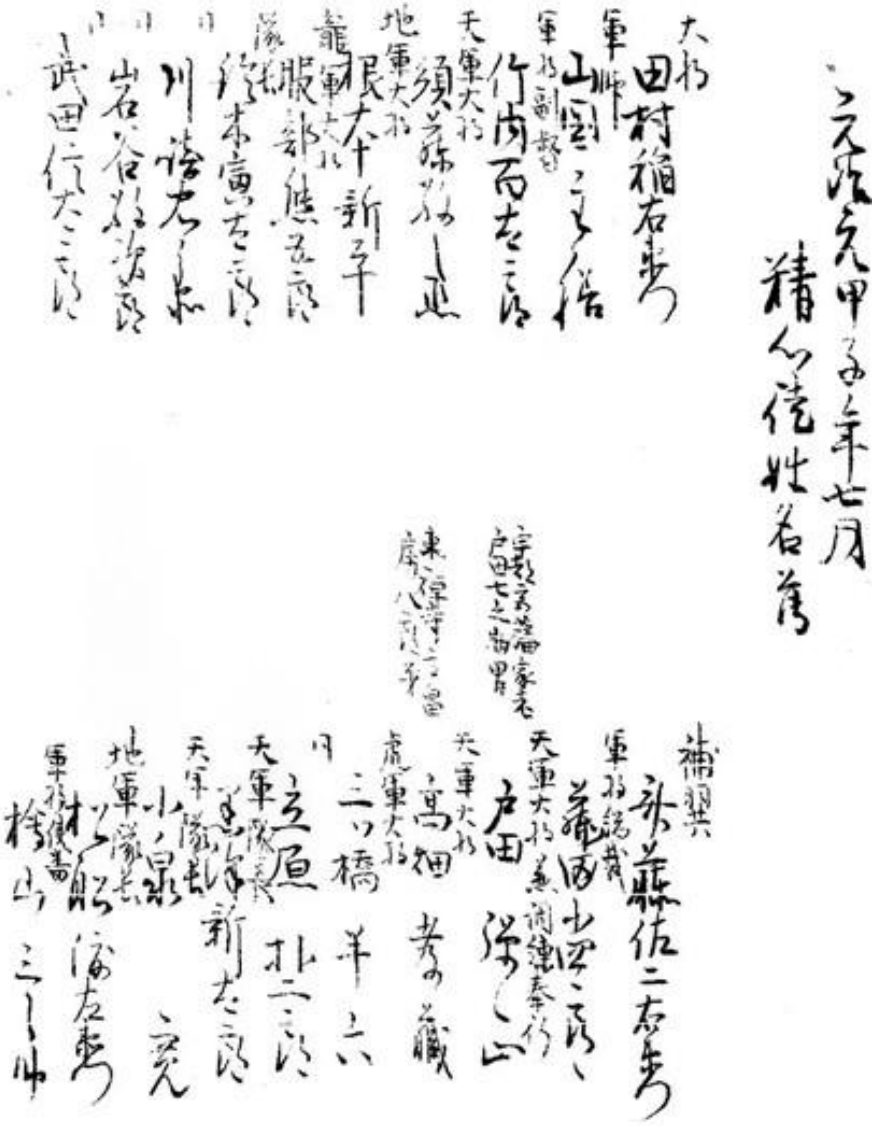
一張紙写・軍令状写・長州之絵圖共愚父迄遣候故御取寄御覧可被下候、云々

【五七頁】

九月十二日認　　長治

大作先生
作三郎様

元治元甲子年九月十二日付、京都詰同役山田長治より江戸詰同役へ之来書也、江戸三絃溝之御屋敷にて　清直写之



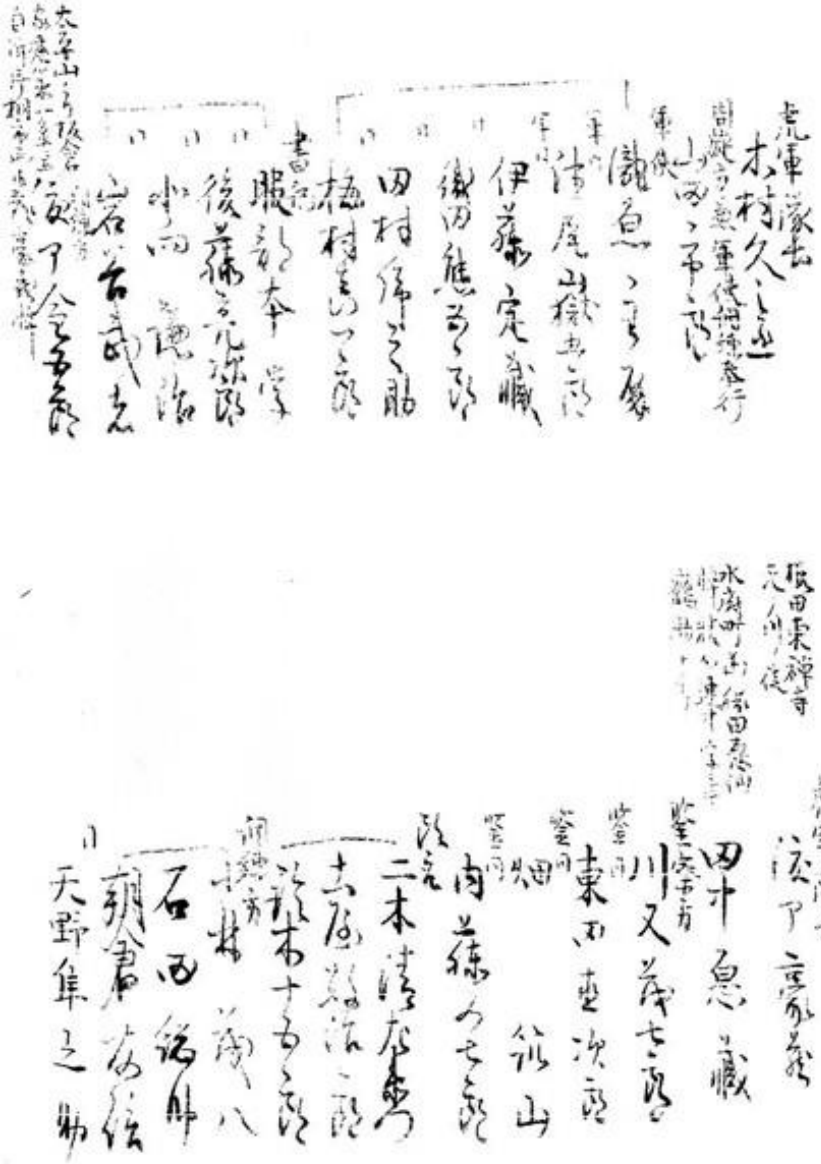
【五八頁】

(三十八)元治元甲子年　精心徒姓名簿《筑波勢及び随従隊士姓名簿》

元治元年甲子年七月

精心徒姓名簿

大将	田村稲右衛門	補翼	斉藤佐二右衛門
軍師	山国主膳	軍将総裁	藤田小四郎
軍将副督	竹内百太郎	天軍大将兼調練奉行	戸田弾正
天軍大将	須藤敬之丞	宇都宮藩家老戸田七之助男	高畑孝蔵
地軍大将	根本新平	東禅寺高畠房太郎弟	三ツ橋半六
龍軍大将	服部熊五郎	虎軍大将	立原朴二郎
隊長	鈴木寅太郎	同	黒澤新太郎
同	川崎忠兵衛	天軍隊長	小泉　寛
同	岩谷敬次郎	地軍隊長	松船渡左衛門
同	武田信太郎	軍将使番	桧山三之助



【五九頁】

虎軍隊長　木村久之丞

桜田東禅寺天ノ川ノ徒　虎軍隊長　渡部豪蔵

周旋方兼軍使調練奉行　山田市郎

水府町幽脇田愿蔵倅　精心連中字シテ鶴助トイフ　田中愿蔵

軍使　瀧原主殿

鑑察方　川又　茂七郎

軍同　神尾嶽五郎

鑑同　東田　直次郎

軍同　伊藤定蔵

鑑同　畑　筑山

同　織田熊五郎

鑑同　内藤　又七郎

同　田村乕之助

頭取　二木　清左衛門

同　梅村真一郎

土屋　敬治郎

書記　服部本学

鈴木　十五郎

同　後藤亮次郎

調練方　小林　茂八

同　北向謙治

石田　総助

同　岩谷武志

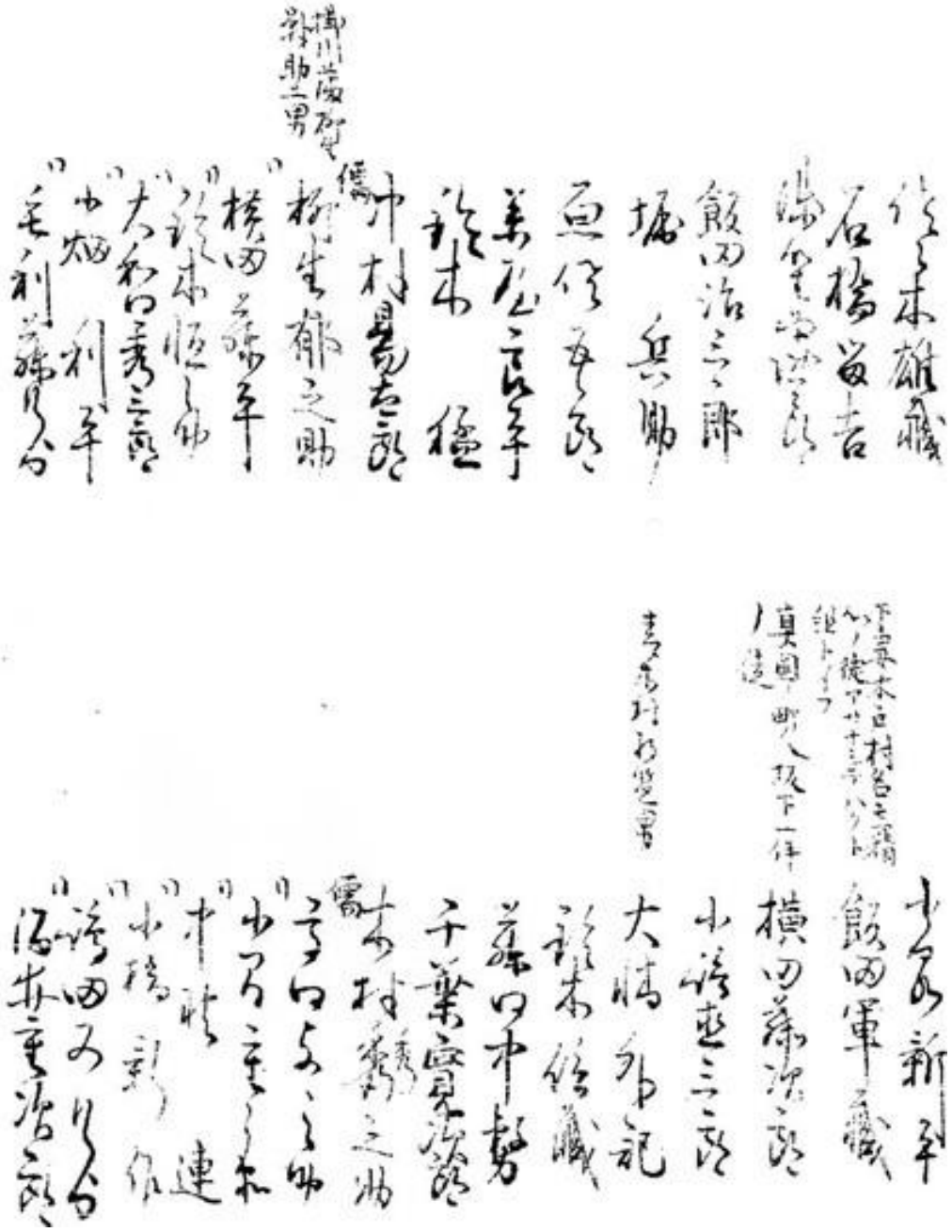
朝倉　友信

太平山より板倉家献策一条ニ而自訴片桐市正御預豪蔵倅　調練方　渡部金五郎

同　天野隼之助

【六〇頁】

同	佐藤継助	同	吉家忠右衛門
同	松延忠次郎	同	石橋栄次郎
同	武藤傳四郎	同	鈴木貞助
同	高歩秀平　〇安カ	同	芹澤助二郎
兵具方	宇佐美宗三郎	兵具方	三浦龜二郎
大和一件ノ徒會津ノ手破テ下ル	濵野松次郎		小林幸八
	栗田源左衛門		浅野善十
	豊田彦之丞		館林義七郎
	嶋田甫吉		市井廣松
	大谷包太郎		大久保圓助
	加藤重兵衛		中山小三郎
	藤田俊之助		高野矢之助
	大樫誠三郎		北条村之助
	小俣泰助		千種太郎
	田村甫五郎		東直次郎



【六一頁】

佐々木雄蔵　小泉　新平
石橋留吉　下妻木戸村名主精心ノ徒アサナシテハクト組トイフ　飯田　軍蔵
浅野平四郎　横田　藤次郎
飯田治三郎　真岡ノ町人坂下一件ノ徒　小島　直三郎
堀兵助　大幡　外記
原佐五郎　青木村将監男　鈴木　信蔵
萬屋良平　藤田　中務
鈴木猛　千葉　寛次郎
中村易太郎　木村　秀之助
儒　柳生郁之助　掛川藩柳生對助二男　儒　高田　与之助
同　横田藤平　同　小間　重兵衛
同　鈴木恒之助　同　中野　連
同　大和田秀三郎　同　小橋　新作
同　小畑利平　同　嶋田又左衛門
同　毛利藤左衛門　同　酒井　重次郎

【六二頁】

小澄兎一郎
小荷駄　宝町和七郎
同　笹川小平太
同　大谷康次郎
同　小嶋周吾
同　渡部加古介
仙城之浪人　儒　藤田芳之助
手城之臣　主水男　同　水野主馬
宇都美宗左衛門
手城之臣　高木主水
壬生領　菅谷村名主　大久保七郎左衛門　随従三十人全
周旋使番　村田四六郎

小荷駄　長谷川勝七
同　羽生泰十郎
同　初嶋市治
同　長谷川勝次郎
同　西山謙之助
同　千葉小六郎
手城領小川村農医　又領主三仕　越惣吉郎男　儒　塚越惣助
薩州ノ浪人父ハ同　用人千八百石　林与七郎
譜代家僕拾八人
沼森村神職　兵具方　高橋上総介
同上総父　大砲鋳立方　同　相模
同　弟　同　同　良助　随従三人合六十人余
天王神主杉山左京　叔父精神心組アサナシテ　剛盗組とイ　昌木　春雄　随従百弐十人余

右何れも一隊長にて手勢且附属随従之士三四十人